都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問いあわせは

都留文科大学附属図書館
住所：402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話：0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

電子紀要トップへ

芥川「西方の人」とゲーテの『ディヴァン』

Akutagawa s“ Seiho no Hito ” and Goethe s *Divan*

稲垣孝博
INAGAKI Takahiro

はじめに

一九二七年七月二十四日の未明、芥川は自ら命を絶つ。彼の絶筆といわれる「続西方の人」、先に脱稿していた「西方の人」は不思議な魅力を持った作品である。福音書に描かれたキリストの生涯を素材にしたテーマ自体の魅力ばかりではなく、読者を様々の想像に駆りたてるコノテーションの多い「文体」の魅力を持っている。芥川は「わたしのクリスト」を創造することによって、自身の現実の生を真摯に対象化しようと試みた、とはおおかた研究者諸氏の一致するところである。作品が自らの現実の生を完結させる芥川自身の行為と、直接に結びついているがゆえに強烈な印象を与えずにはおかない。にもかかわらず、読者にひとつの道を指示するのではなく、解釈の多様性を許容するのも魅力的である。一方に父なる「聖霊」、他方に母なる「マリア」を配して、その対立軸の中心に悩み苦しむ「人間クリスト」が据えられる作品の基本構造についてもやはり諸氏の一致するところである。しかしこの枠組みの内実に一歩立ち入ると、その解釈は「天上から地上へ」か「地上から天上へ」かのように百八十度の懸隔を見せる。一方で笹淵友一氏は「『西方の人』はこのように宗教性や倫理性を欠く単なる上昇型浪漫精神と呼ぶべきものに近づいているという印象を与える[1]」と語り、「『西方の人』の主題は何かと問われれば、筆者は直ちに、『永遠に超えんとするものの悲劇』と答えたい[2]」と断言する。他方で佐藤泰正氏は、「永遠に超えんとするもの」の「宿命」や「悲劇」を強調することに疑念を呈して「永遠に守らんとするもの」マリアの役割を重視する[3]。この解釈の両極は周知のように、「西方の人」第三十六章「クリストの一生」の一句、「天上から地上へ登る為に無残にも折れた梯子」にかかわる論争にその極点を見出すのである。この論争が、

両陣営それぞれに説得力のある論拠を展開してなかなかに結着を見ないのも、「西方の人」という作品の性格に由来するのかもしれない。佐藤泰正氏が「この『西方の人』一篇を論ずることはそのまま、評者自身の『本体を露』わすこととともなろう[4]」と断ずるがごとく、この作品は「比喩の文学」たる特性をいかんなく発揮していると言えよう。

さて小論においては、この論争に容喙する意図は毛頭もち合わせていない。この作品の魅力に惹かれるひとりの読者として、その魅力の一断面をわずかにでも照射できたらと願うばかりである。それをひとりの脇役の働きに焦点を絞って試みてみたい。「西方の人」のはじめから「続西方の人」の最後まで主人公クリストと陰に陽に対比されるゲーテ像である。最後の最後まで影のようにクリストの周辺につきまとうゲーテという人物像の役割全体の解明は無理としても、「或阿呆の一生」の第四十五章Divanに取り上げられたゲーテの人物像が、どのような形で「西方の人」に取り入れられていったのかを考えるなかに、作品「西方の人」におけるゲーテ像の役割の一端を明らかにしたい。これが小論の目的である。実証を目指しながら、その限界に阻まれ、仮説と推論の方法に頼らざるを得なかった。仮説が実証を導くよくある例にならうことを期待したい。

一

まずは作品の具体的な記述の確認からはじめよう。「西方の人」では第三章「聖霊」、第二十六章「幼な児の如く」、第三十六章「クリストの一生」の三箇所で、また「続西方の人」でも第十四章「孤身」、第十六章「サドカイの徒やパリサイの徒」、第二十二章「貧しい人たちに」の三箇所でゲーテにたいする言及がされている。頻度をどう考えるかは、ひとまず措いたとしても言及箇所の重要性については異論があるまい。まず「西方の人」の第三章「聖霊」で著者は、「永遠に超えんとするもの」の象徴である「聖霊」を紹介しながらゲーテを引き合いに出す。「ゲエテはいつも聖霊にDaemonの名を与へてゐた。のみならずいつもこの聖霊に捉はれないやうに警戒してゐた[5]。」ここで作者は、ゲーテを援用することによって「聖霊」の脱聖書化をおこない、価値の相対化を提示する。「聖霊は悪魔や天使ではない。勿論、神とも異なるものである。」「聖霊」はわれわれを引き揚げていく求心力を持つとともに「捉はれ」る危険性をもあわせ持った存在である。作品の出発点で作品の「動輪」ともなる「聖霊」の紹介にゲーテが引き合いに出されている事実は注目に値する。

次に第三十六章「クリストの一生」の書き出しで、主人公クリストの一生が以下のように総括される。「勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも父の聖霊の支配を受けてゐた。彼の十字架の上の悲劇は実にそこに存してゐる。」（第十五巻二七二）そしてこの悲劇的な人生と対照的な人生、いや正確に言うと、この悲劇を乗り越えた人生を歩んだ詩人の例としてゲーテの名が挙げられる。「聖霊はこの詩人の中にマリアと吊り合ひを取つて住まつてゐる。」「彼は実に人生の上にはクリストよりも更に大きかつた。」しかし作者は章の半ばでゲーテを語りながら、その語りの調性を転換させている。「しかし我々のゲエテを愛するのはマリアの子供だつた為ではない。」「我々のゲエテを愛するのは唯聖霊の子供だつた為である。」この転調と

ともにクリストの一生の描き方も一転して肯定的な響きを持ってくる。「クリスト教は或は滅びるであらう。少くとも絶えず変化してゐる。けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすであらう。」

「続西方の人」の最終章「貧しい人たちに」では、「しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう」（第十五巻二八九）の表現がふたたび提示されて、最後に「我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう」の言葉とともに作者は筆を擱く。しかしこのふたつの表現のあいだに突然のように挿入される「ゲエテは婉曲にクリストに対する彼の軽蔑を示してゐる。丁度後代のクリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに」の文章は何を意味しているのだろうか。最終局面におけるクリストとゲーテの位置関係は、作品理解の鍵を握っているように思われる。

「西方の人」におけるゲーテを論じた評者は、意外に限られている。ここで二、三の例を紹介しておこう。高田瑞穂氏は、「「西方の人」論」のなかで「聖霊」の章に描かれたDaemonを論ずるにあたって「闇中問答」の「僕」の発言「お前は、犬だ。昔あのファウストの部屋へ犬になつてはいつていつた悪魔だ」を援用しつつ、ここに『ファウスト』第一部の「影」を見ている。また「続西方の人」第十四章「孤身」に言及された『ファウスト』第二部第一幕冒頭のファウストの独白を引用した後にこう書く。「ファウストの困憊の根源が、『最高の存在を目ざしてたゆみなく努力をつづける』ことの中にあったこと、換言すれば、ファウストが『永遠に超えんとするもの』の宿命の中にあったことは、改めて言うまでもないであろう[6]。」ここで高田氏は明らかに、ゲーテを「永遠に超えんとするもの」の側に重点を置くものと考えている。さらに氏は、第三十六章「クリストの一生」に関連して「ゲエテ？なぜゲエテがここに登場しなくてはならないか？[7]」と至極当然の問いを発している。にもかかわらず、『論考』のなかでは残念ながらその答えを明示してはくれない。

笹淵友一氏は、おなじ第三十六章「クリストの一生」に関して「聖霊の子供としてのゲーテの立場を重視した作者[8]」と断定する。「イーカロスの昇天の志向」から論じて、「西方の人」を「上昇型浪漫精神」の、ひいては「永遠に超えんとするもの」の悲劇と断ずる氏にしてみれば、芥川のゲーテ讃美もやはりファウスト的無限欲求の方向から考えざるを得ないのだろうか。

前二者とは対照的に関口安義氏は、「聖霊」の章を論ずるにあたって、高田氏と同様ゲーテのデーモンの概念を引用しながらも、「闇中問答」と「侏儒の言葉」で芥川の使用している「中庸」という概念に注目している。関口氏は、「侏儒の言葉」から芥川の以下の言葉を引用する。「古人はこの態度を中庸と呼んだ。中庸とは英吉利語の good sense である。わたしの信ずるところによれば、グッドセンスを持たない限り如何なる幸福も得ることは出来ない。」そして、つづけてこう書く。「芥川はこの『吊り合ひの取れた性格』の持主の代表者として、何度もゲーテを持ち出している[9]。」「芥川がかくもゲーテにあこがれたのは、人生上のたくましい生き方にあるのだろう。」すなわち関口氏は、ゲーテの芸術家・詩人としての現実の生き方そのものに芥川のゲーテ理解の鍵があると見ているのである。しかし関口氏もこの点には若干の留保をつけている。第三十六章「クリストの一生」の後半から「クリストの一生はみじめだ

つた。が、彼の後に生まれた聖霊の子供たちの一生を象徴してゐた。(ゲエテさへも実はこの例に洩れない)」の一節を引用してこう記す。「かくも偉大なゲーテも自分の仲間の一人であり、窮極はこの『娑婆苦』から逃れられないという認識、そこにはしたたかなまでの芥川の言い開き、自己肯定がうかがえる[10]。」

確かに、「偉大な」ゲーテ像は主人公クリストの位置を測る「鏡」として使用されていると言ってもよかろう。「永遠に超えんとするもの」聖霊と「永遠に守らんとするもの」マリアのあいだで自分の位置を探るクリスト、両者の懸隔に苦しむクリストにとってゲーテはライヴァルであり、先導者であるとともにまた乗り越える対象でもある。あるときは「偉大な」ゲーテ像を前にして自己を卑下し、あるときは拮抗し、またあるときは優越を自覚する。

小論においては、「クリストよりも偉大」に見えた詩人ゲーテの前に「絶望に近い羨ましさ感じ」、自己を「生活的宦官」と卑下せざるを得なかった「或阿呆の一生」の主人公を出発点としたい。そして、「西方の人」と「続西方の人」で最終的に達した、関口氏言うところの「自己肯定」の局面とはなんだったのかを考えてみたい。

二

一九二七年十月の『改造』に遺稿として発表された「或阿呆の一生」には、昭和二年六月二十日付の久米正雄宛書簡が添付されている。その日付からも推測されるが、実際に書かれたのは、部分的に重なるとしても全体としては「西方の人」よりも前だと思われる。この作品は、芥川自身が「僕の阿呆さ加減を笑つてくれ給へ」と書くとおり、彼の現実の生涯をベースにしている。しかしそれはあくまで「自伝的エスキス」であって、また芥川の強い「制作意欲」、創作過程のフィルターで濾過されたものである。このことに注意を払わないと、われわれは足元をすくわれる危険に直面するだろう。「人生は一行のボオドレエルにも若かない」とうそぶく二十歳の青年を紹介する「時代」の章にはじまって、「言はば刃のこぼれてしまつた、細い剣を杖にしながら」「その日暮らしの生活」をする「敗北」の章で終わる構成は、見事なストーリー性を持つのである。この作品を「芥川文学の総決算」などと早とちりすると、彼の文学全体を「敗北の文学」などと総括する陥穽に陥るのである。

さてわれわれも材源としての直接体験と創作プロセスの問題に留意しながら、「或阿呆の一生」の第四十五章Divanを考えてみたい。まずは全文を確認しておこう。

> Divanはもう一度彼の心に新しい力を与へようとした。それは彼の知らずにゐた「東洋的なゲエテ」だつた。彼はあらゆる善悪の彼岸に悠々と立つてゐるゲエテを見、絶望に近い羨ましさを感じた。詩人ゲエテは彼の目には詩人クリストよりも偉大だつた。この詩人の心の中にはアクロポリスやゴルゴタの外にアラビアの薔薇さえ花をひらいてゐた。若しこの詩人の足あとを辿る多少の力を持つてゐたらば、――彼はディヴァンを読み了り、恐しい感動の静まつた後、しみじみ生活的宦官に生まれた彼自身を軽蔑せずにはゐられなかつた。(第十六巻六二)

「或阿呆の一生」の章を追って前から読み進んできた読者は、ここでかなりの違和感に囚われるのではないだろうか。確かにこの直

前の章は「死」と題され、縊死の試みにもかかわらず死ぬことのできない主人公の鬱々とした生活が描かれている。主人公の先鋭化した神経に多少の誇張は許されるとしても、「彼はあらゆる善悪の彼岸に悠々と立つてゐるゲエテを見、絶望に近い羨ましさを感じた」とか「詩人ゲエテは彼の目には詩人クリストよりも偉大だつた」の表現はあまりにも大仰に過ぎるのではないか。そして「彼はディヴァンを読み了り、恐しい感動の静まつた後、しみじみ生活的宦官に生まれた彼自身を軽蔑せずにはゐられなかつた」とは、はたしてどんな事態なのだろうか。

まずは「ディヴァン」とはどのような書物なのだろうか。現在は『西東詩集』と訳されるこの詩集は、一八一九年に発表されているが、一八一四年以来ゲーテが書き溜めてきた詩を十二の詩群、「書」(Buch)に纏めたものである。それぞれの「書」には、短いもので二編、長いもので五十数編の詩が収められていて、各々の詩がまた独自のタイトルを持って単独の詩としても読めるようになっている。成立史としては、十四世紀ペルシャの詩人ハーフィスの詩集がドイツ語に訳されたこと、この詩人にゲーテが己の同類を発見したこと、若い人妻マリアンネ・ヴィレマーとのあいだで「愛の歌」を交わす「恋愛体験」のあったことなどがゲーテ伝や文学史には説明されている。確かにマリアンネとの「相聞歌」をもとにした「ズーライカの書」やイスラムの天国を舞台にした「天国の書」は、この詩集の重要な部分だが、ほかにも様々な成立の経緯を持つ詩を収めた「観察の書」や「箴言の書」など『西東詩集』は多面性を持っている。比喩、おもわせぶり、形而上的な思念を多分に盛り込ませた詩も多く、すらすらと読んで「感動」するような詩集ではないように思われる。一度でもこの詩集を読んだことのあるもの、あるいはドイツ人でも難しいとの評判を耳にしていたものは、「彼はディヴァンを読み了り、恐しい感動の静まつた後」の部分に疑念を呈せざるを得ないだろう。この部分が「詩集全体を通読し」の意味であるとすれば、それは芥川のフィクションである可能性が高い。

つづく「しみじみ生活的宦官に生まれた彼自身を軽蔑せずにはゐられなかつた」の表現にも違和感を覚えざるを得ないであろう。なぜなら『西東詩集』は、けっして「生活的逞しさ」を表現した詩集ではないからである。むしろ冒頭の詩「遁走」が示すように、この詩集は現実(西方)から逃れ、想像の世界に設営された東方の小宇宙に遊ぶ老詩人の愛と快楽を前提としている。実際作者ゲーテもこの時代、ナポレオン戦争とその後の政治的変化についていけず、主人であるアウグスト公との確執もあり、現実(時代)との乖離を意識せざるを得ず、なかば「浮いた」状態を強いられていたのである。ゲーテ自身はおそらく何らかの挫折感を味わいながら、回春を求めつつ、精神の世界に「愛と快楽」の宇宙を創造しようとしたのではなかろうか。

それでは「或阿呆の一生」の主人公は、『西東詩集』のどの部分に感動したのだろうか。まずは「ズーライカの書」だろうか。この書を『西東詩集』の中核と見る評者は多い。とくに人物伝を中心とする伝記は、『西東詩集』を紹介するに際してマリアンネ・ヴィレマーとの現実の関係に多くの紙数を割いている。「或阿呆の一生」でも第三十七章「越し人」で「彼と才力の上にも格闘出来る女」が語られ、第四十七章「火あそび」では「プラトニツク・スウイサイド」を約束する女性が登場する。芥川がゲーテとマリアンネの体験

を己の女性関係に引き比べてみた可能性は大いにある。ただし「ズーライカの書」では、生身の恋愛感情というよりは、想像上の「西方」にしつらえられた舞台でハーテムとズーライカの面をかむった「仮面の恋」が演じられる。しかもそれは「天国の書」での詩人と天女との清浄な会話に昇華されていく。もちろん、であるからこそ芥川はこの二人の関係に惹かれたのであるとの論も成り立つであろう。

しかし「清浄な恋」の目差す方向は、「恐ろしい感動」という表現とどうしても調和しないように思われる。ここでは第四十五章Divanの冒頭の表現「Divanはもう一度彼の心に新しい力を与へようとした」にこだわりたいと思う。この章に先駆ける第四十四章「死」では、自殺を試みながら死ねずにいる主人公の苦しみが描かれている。その章を受けて「もう一度彼の心に新しい力」と語りはじめたのであるから、この「新しい力」はどうしても「死」と関わるものでなければならない。

いずれにしてもここで基礎的な問題に立ちかえって、芥川が『西東詩集』をどう読んだかの問題を、実際の文献の面から考えてみよう。

三

芥川がゲーテについての知識を、いつ、いかなる文献で蓄積していったかは不明な点が多く、ある程度推測に頼らざるを得ない。岩波新全集の索引で検索してみると、一九一六年九月の久米正雄宛書簡に「この頃ゲーテ言行録と申すものをよみ感歎多時手巻を釈くに忍びざるもの有之候」（第十八巻五四）の文が見え、一九二〇年九月二十日付の「雑筆」には「亀尾君訳エツケルマンのゲエテ語録」（第七巻一一九）への言及が確認される。

ゲーテの作品自体を読んだ形跡が残されているもっとも古い例は、日本近代文学館に保存される旧蔵書中の Goethe. *Novels and Tales*. London, Bell, 1911 だと思われる。この作品集の目次には Elective Affinities の項目に 4th Aug 1915、The Sorrows of Young Werther の脇に 28th Dec 1913 の書き込みがある。したがって東京帝大英文科に入学してまだ間のない芥川は、一九一三年の暮れに『若きヴェルターの悩み』を英訳で読んだことがほぼ確認できる。

ところで芥川がゲーテの作品を原文で読んだ可能性はないのだろうか。一九一〇年九月に入学した第一高等学校では、ドイツ語の授業が週九時間あったと伝えられている[11]。ほとんどの授業が原書講読に当てられていたことを考慮すれば、高等学校の三年間でもかなり読めるようになっていたはずである。ところが芥川自身のドイツ語に関する証言には、あまり威勢のよいものが見られない。一九一三年八月の山本喜誉司宛書簡には「そのあとでGrimmのmärchenの中のわからない所をきかれたが一寸よんでみても判然しないからいゝ加減な事を教へて『さうにちがいない独乙語にはこんな使ひ方が沢山ある』と誤訳にまで応援を加へて来た」（第十七巻一一〇）という記述が見られ、さらに同じ頃のことを回想した「あの頃の自分の事（削除分）」には「尤も洋と云つても語学は、独乙語も仏蘭西語もものにならなかつたから、比較的ものにならなさの甚しくない英語で、一番余計本を読んだ」（第四巻一四四）と書かれている。

日本近代文学館に残された旧蔵書からこの問題を考えるとどうなるのだろうか。「芥川龍之介文庫目録[12]」に記載された六三八点の

洋書のうち、ドイツ語のものは二十一冊[13]である。そのうち、ボードレール、ストリンドベリなど外国ものの翻訳が八冊を占める。ドイツ文学の原書は、ホフマンスタールの三冊が目立つ以外、ニーチェ、シュニッツラー、ホフマン、デーメルが各一冊ずつ。他は、ラファエル前派など美術関係の入門書が四冊、ギリシャなどの哲学者の紹介・入門書が三冊である。この入門書類について、たとえば*Präraffaelismus*は図版が多く、やさしいドイツ語で書かれた啓蒙書であるが、全五十五ページ中十五ページまでかなりの数の語意の記入が見られる。最初の数ページに語意が書きこまれたものの多いことから、おおかたは教養の修得とともにドイツ語の練習のために読まれたものと思われる。

ニーチェの*Also sprach Zarathustra*は一九一三年二月十一日の日付が書きこまれているが、全五百二ページ中で、語意的書きこみや下線の多く見られるのは六十二ページに過ぎない。教科書として使用したと思われるが、残りは流し読みしたとしてもこれを読了したと見なすことはできないであろう。この本の書きこみからちょうど十年後、一九二三年、当時東大独文科の学生だった菅藤高徳とともに読んだホフマンの*Die Elixiere des Teufels*には、三百十五ページ中最初の七十一ページまで多数の語意的書きこみが見られる。

翻訳ものが八冊残されている事実は注目に値する。当時英訳よりも独訳での方が手に入りやすい書物も稀ではなかったのかも知れない。いずれにせよ芥川が、英語とともにドイツ語ででも原書を自由に読みこなそうとの意欲と願望を持っていたことは確かである。しかし三十歳を過ぎて読んだ*Die Elixiere des Teufels*の書きこみから判断する限りでは、ドイツ語の読解力は辞書を片手に苦闘するという段階からそれほど進歩していなかったと推測される。

これだけのことを言うために前置きがひどく長くなってしまったが、結局、芥川はゲーテの作品を原書では読んでいなかったと断言しても間違いはなかろう。すくなくとも、断片的なものは別として、小説や詩集全体を一個の作品として楽しむというような読みかたはできなかったはずである。

二十一歳の芥川は、一九一三年の暮れに『若きヴェルターの悩み』を英訳で読んだ。芥川のゲーテ体験にとって一九一三年は、画期をなした年だったと思われる。それはもちろん、鷗外訳『ファウスト』の刊行であり、『ファウスト』の観劇体験だったのではなかろうか。芥川が鷗外の作品から多大の影響を受けたことは、芥川自身が「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い」のなかで中学時代を回顧しながら「森さんのものも大抵皆読んでゐる」（第四巻一五九）と書き、一九二五年の合評会では「貴方は夏目さんの感化より、鷗外さんの感化が多いやうぢやないですか」と問われて、「森さんの翻訳された小説の感化ぢやないですか」（第十六巻二三八）と答えているところからも推察される。

芥川の具体的な創作への影響という点では『諸国物語』に収められた諸短編が重要であろうが[14]、自らの作品創造とは一線を画しながら、別の意味で『ファウスト』翻訳はのちの芥川に強い作用を残しつづけたと考えられる。一九二四年、山本有三の使いで軽井沢のつる屋旅館に芥川を訪ねた高橋健二は、次のように証言している。「私が独文の学生だと聞くと、ゲーテだけは骨太くて太刀打ちできない、とゲーテを礼賛した。（中略）『ファウスト』第一部は、手がとどかないというほどではないが、第二部の空想の大きさに至

っては、けたはずれで、到底かなわない、と芥川は感嘆していた[15]。」芥川がのちに読むゲーテ伝の一冊、クローチェの *Goethe*（英訳）の二十四ページに No, Croce, no, eve(n) you can not understand the glamour of Faust II の書きこみが見られる事実、絶筆の「続西方の人」にまで『ファウスト』第二部への言及が記述されていることなどから推測して、『ファウスト』、とくにその二部が芥川の内部で「偉大なゲーテ」のイメージと密接に結びついていたことは明らかであろう。

しかし芥川のゲーテ体験の質を決定づけたのは、同じ一九一三年の十一月に出版された鷗外の『ギヨオテ伝』ではなかっただろうか。ほぼ十年後の「文芸鑑賞講座」で「又実際天才の伝記――たとへば森鷗外先生の『ギヨオテ伝』を読んで御覧なさい」と勧めているところから判断しても、芥川がこの伝記をかなり読みこんだと考えても差し障りはあるまい。『ギヨオテ伝』は、アルベルト・ビルショフスキ『ゲーテ――その生涯と作品』の抄訳とも言えるもので、目次はほぼ原作に忠実に配しているものの、内容を大胆に圧縮し、引用などは割愛したものである。ビルショフスキの『ゲーテ』は、ゲーテの実生活上の事実を丹念に追って、詳細な実証に優れていると言われる。ただ現在の視点から振り返ると、ゲーテにたいする人格的尊敬に貫かれているゆえに、十八世紀後半に見られた「ゲーテ神格化」の潮流を促進したとの指摘もなされる。鷗外から八十年後にこの伝記を完訳した高橋義孝は、自らもゲーテ讃美者であることを認めながら「訳者後記」に以下のように書いている。

かつて森鷗外がビルショフスキのゲーテ伝を各種伝記のうちで「もっとも便宜に纏まったもの」として愛読し、これをいわば底本として用いながら彼のゲーテ伝を書いて以来、わが国初期のゲーテ受容はとりわけビルショフスキの恩恵をこうむると同時に、ゲーテは讃美されるべき師表的存在だという固定観念を植えつける「毒」をも吸い込んだのである[16]。

芥川が鷗外の『ギヨオテ伝』を媒介してこの「毒」に感染し、それが彼の「偉大なゲーテ」像形成の一因をなしたと言ったら、それは言い過ぎというものだろう。しかし芥川が、ゲーテの作品や作品論よりも人生論に惹かれていた事実は確認しておかねばなるまい。しかも「偉大なゲーテ」像は、彼独自のイメージではなく、大正時代の知的教養人一般に流布していた「常識」だったのである。さらに言えば芥川自身がそのことを自覚して、「偉大なゲーテ」像を作品創作の戦略のうちの取りこんだのだとも考えられる。

日本近代文学館に残された旧蔵書では、二冊の「ゲーテ伝」が注目に値する。一冊は、Lewes. *The Story of Goethe's Life*. London, Smith, 1873 である。この書には下線、傍線がかなりの数書きこまれていて、芥川がかなり丁寧に読んだものと思われる。ルイスの『ゲーテ伝』は、当時英語で書かれたものではもっとも信頼され普及したゲーテの伝記と言われている。しかし旧蔵書中の一冊はその簡約版なので、作品の引用などの多くは省略され、鷗外の『ギヨオテ伝』とおなじく、ゲーテの人となりに絞って伝える構成になっている。

一九二四年十月、芥川は京都の小林雨郊に、その年の夏京都丸善で見かけた *Life of Goethe* を送らせるよう依頼の手紙を出している

（第二十巻九七）。旧蔵書にはその第二巻 Brown. *Life of Goethe*, vol.2. London, Murray, 1920 が残されている。もっともこの蔵書には東京丸善のシールが貼られているので、この時の手紙の依頼どおりに京都から送られたものではなく、のちに東京丸善で購入したものと推定される。これが二冊目である。

さて芥川が『西東詩集』をどこでどのように読んだかの本題に戻ることにしよう。鷗外の『ギヨオテ伝』では第四十章「マリアンネ」で、マリアンネ・ヴィレマーとの邂逅の模様が説明されている。しかし『西東詩集』（鷗外は「西東ヂワン」と表記）についてはハーフィスの紹介も含めて二、三行で触れられているに過ぎない。これでは『ギヨオテ伝』の読者が『西東詩集』に興味をもつ可能性はほぼ皆無と言ってもよかろう。ルイスの*The Story of Goethe's Life* も事情は似たようなものである。編年体で七章構成となっているこの書は、第七章で一八〇五年から一八三二年までのなんと二十七年間を扱っている。当然作品への言及は極めて少なく、この書を読んで『西東詩集』への関心を喚起されたとは考えにくい。

前二著に比較すると、ブラウンの*Life of Goethe* は、作品紹介にかなりの重点を置いている。旧蔵書に残された本は第二巻なので、第二十三章から第三十九章で構成されていて、その第三十二章は WEST-ÖSTLICHER DIVAN, 1814-1818 と作品名をタイトルに付している。この章では、ゲーテの生活上の事情説明にも紙数を費やしているが、タイトルにたがわず『西東詩集』を中心に論じていると言ってもよかろう。老作家の精神と創作力の「回春」(rejuvenescence) によって詩作された「ズーライカの書」を『西東詩集』の要諦として、代表的な詩節数箇所を原詩で紹介している。また一方では、この詩集を人生の智慧にたいする「省察の宝庫」と理解し、やはり数箇所の原詩を箴言として引用している。全体としてこの章は、『西東詩集』の紹介として極めて簡にして要を得たものと認めても異議はなかろう。おそらく芥川はこの章を読んではじめて『西東詩集』の内容を知ったのではないかと思われる。

しかし芥川がこの詩集の全体像を手にしたのは、一九二六年五月に発行された大村書店版『ゲーテ全集』第二巻においてであったことはほぼ間違いがなかろう。一九二四年六月の南幸夫宛て書簡で「ゲエテ全集の事、聚英閣のは小生の友人も関係してゐる事であり、推セン出来ると好いのですがどうも公平に考へて大村の方のが好くはないかと思ひます」（第二十巻七〇）と、この年刊行がはじまる大村書店版『ゲーテ全集』を推奨している。この時期強くゲーテに関心を持っていた芥川がこの後次々と刊行されていく『全集』の各巻を読まなかったとは考えにくい。すくなくとも、送られてきた新刊にざっと目を通すことはしたであろう。

四

繰り返すことになるが、『西東詩集』は難解の書である。大村書店版『ゲーテ全集』の訳者、奥津彦重も「西東詩篇」の前につけた二十数ページの「解題」の冒頭にこう書いている。

> 獨逸の諸評家も言つて居るやうに、ゲーテの「西東詩篇」に理解の歩を入れるのはなかなか困難なことである。獨逸人でさへもこれを難解の書として、「ファウスト」第二部と同じく、その有名な割合には實際に讀まれることは少いらしい。既に本

國に於てさへもかかる次第であるから、吾吾外國人にとつては、それを眞に味識するのは至難の業と言はなくてはならない[17]。

芥川はもちろん、『全集』第二巻の冒頭に書かれたこの文章を読んでいたであろう。「或阿呆の一生」の主人公に「ディヴァンを読み了り」、「恐しい感動」を覚えたと告白させたとき、芥川のこころに密かな快感がうごめいた可能性もある。実際、一九二六年の夏から暮れにかけての芥川は、不眠症や下痢に悩まされ、鵠沼海岸と田端を往復しながら苦しい日々を送っていた。この難解な詩集の全体を味読する読み方はできなかったはずである。「ディヴァン」を『西東詩集』の全体と理解するのならば、「ディヴァンを読み了り」、「恐しい感動」を覚えたのは完全なフィクションである。

しかし「恐しい感動」が虚構の感動であるならば、その作品のコンテキストのなかで理解されなければならない。「或阿呆の一生」第四十五章は、「Divanはもう一度彼の心に新しい力を与へようとした」ではじまり、「恐しい感動」と「生活的宦官」の述懐で終わっている。「恐しい感動」は冒頭の「新しい力」に帰環する構造になっている。そしてこの「新しい力」は当然、直前の第四十四章「死」を受けている。つまり「或阿呆の一生」を素直に読むならば、「恐しい感動」はこの「死」との関連以外では考えられない。

さてここで本論最大の仮説を提起しよう。それは、「恐しい感動」は『西東詩集』全体に向けられたものではなく、この詩集の有名な一句をめぐるものではなかったのだろうか、という仮説である。「或阿呆の一生」の文脈から判断されるだけではなく、現実の芥川もこの時期「いかに死すか」の問題に取りつかれていたと考えられるからである。死を願い、死を恐れて苦しむこころに「死して成れ」の一句が強烈に飛びこんできたのではなかろうか。しかも芥川のこの体験にブラウンの*Life of Goethe* が重要な役割をはたしたというのが筆者の推測である。一九二六年（大正十五年）の夏から秋にかけてのある時期、芥川は奥津訳「西東詩篇」を手にした。そのとき改めて、ブラウンの*Life of Goethe* 第三十二章を読んだのではないか。あるいはゲーテの伝記に関心を持ち、*Life of Goethe* を読み進むうちにDivan の紹介にこころ惹かれ、改めて奥津訳「西東詩篇」を読み直したのかも知れない。なぜなら第一に、「或阿呆の一生」の第四十五章に付したDivanというタイトルの表記方法が、単に芥川の韜晦と見るよりも、*Life of Goethe* の第三十二章（*Divan* を主語として説明が繰り返されている）の読解から連続的に執筆につながった結果だと考えるほうが自然だからである。また、やや隔靴掻痒の感のある奥津訳日本語の群れのなかから「死して、成れよ！」の句と出会うよりも、*Life of Goethe* の簡便な説明とともに要所だけ引用された原詩のなかに Stirb und werde! の句に感動する確率のほうが高いように思われるからである。ドイツ語基礎動詞の命令形の響きは、芥川のこころに強い反響を呼び覚ましたのではなかろうか。

ただし*Life of Goethe* には原詩 SELIGE SEHNSUCHT の最後の一節、四行が引用されているに過ぎない。どちらが先かは措いたとしても、芥川はいずれ奥津訳でこの詩の全体を読んだことは確実である。この詩を奥津は以下のように訳している。

幸ある憧憬

誰にも語るな、聖者をおいては、

衆生は直ぐにも嘲笑ふべければ、
焔に飛び入つて死ぬをのぞむ
かの生ある者をこそわれの讃ふと。

汝を生み、汝も生む業を營む
かの愛の夜な夜なの涼気のうちに、
まだ知らぬ欣希の俄かに襲ふ、
静かなる蝋燭の輝くときに。

闇たちこむる陰のうちに
汝の閉ぢこめらるること最早なし。
さて新らしき欲求の汝を軀りて、
一しほ立優りし抱合に導かん。

遠き所も汝には難きことなし、
飛び、追はれて、汝は来る。
しかも遂には、光をねがひて、
胡蝶となれる汝、身を焼き亡ぼす。

「死して、成れよ!」、この意を
汝、身にさとらざる限りは、
この暗き地上の世界にて、
ただ陰氣なる客人にすぎざらむ。

この詩は『西東詩集』の冒頭を飾る「歌人の書」の末尾に置かれ、詩集全体の方向性を示していると言われる。闇と光、エロス的なものと天上的なものの対立のなかで、地上的な愛が「より高いまぐわい」へと昇華されることを憧憬する。その核をなすのが「焔に飛びこみ身を焼く虫」の比喩である。

奥津訳は全体としてこの詩の核心を捉えそこなっているといっても過言ではなかろう。まずタイトルの「幸ある」は原詩ではSeligeであるが、この言葉は、ハンブルク版『ゲーテ全集』の注釈によれば、ゲーテ自身とともに当時の使用法ではより宗教的領域に関連づけて使われていたとのことである[18]。奥津訳は、この「宗教性」「天上性」を捉え損ねていると言えよう。憧憬の対象である「抱合」は、「一しほ立優りし」と訳されているが、これは「より高い」「より天上的な」という意味である。なによりも第四節に重大な問題がある。原詩を示そう。

Keine Ferne macht dich schwierig,
Kommst geflogen und gebannt,
Und zuletzt, des Lichts begierig,
Bist du, Schmetterling, verbrannt.[19]

Schmetterlingを「胡蝶」と訳すのはいかにも優美な雰囲気をかもし出すが、この場合ふさわしい訳とは言いがたい。「追はれて」は、bannen という動詞を「破門する」「追放する」の意に解釈したのだが、ここでは「呪縛されて」の意味が適当であろう。運命的なもの、より高次の何ものかに「囚われて」「飛んで来る」のである。「光をねがひて」も、「闇」にたいする「光」ではあるが、「焔を欲して」

というニュアンスもこめられている。詩の第一節で「焔に飛び入つて死ぬをのぞむかの生ある者をこそわれの讃ふと」と謳いあげられた部分と呼応しているのである。「呪縛されて」に「本能の命ずるままに」の意味もあると考えると、ここで焔に飛びこむのは、どうしても「胡蝶」ではなく「蛾」でなくてはならない。芥川は詩人的直感と想像力によって、このSchmetterlingは「蛾」と訳すのがふさわしいことを理解していたのではなかろうか。奥津自身も第一節の「註」に「ハーフィスが蟲燈火に飛び込みて死ぬを、愛の焔に焼かるる男女に喩へて歌ひしを、ゲーテは彼の人生観に適する如くに改めたるなり」と書いているのだから。

奥津は「死して、成れよ！」の「註」にこう記している。「前の考を押し進めて一般の場合に用ひ、更正を説き、又は小さき我を殺して大我に生きよと説くなり。」芥川がこの「大我」をどのように解釈したのか。おそらく芥川は奥津の「解題」に頼ったのではなかろうか。何しろこの「解題」は肝心の訳詞よりも前に置かれ、二十二ページにわたるかなりの存在感を持ったものだからである。奥津は一般的な成立史のほかに「この詩集の精神」「この詩集全体のイデー」について数ページを費やしている。ゲーテは時代を超える「永遠回帰の理法」を求める。「徹底的な生の肯定」の立場に立つが、個々の現象の肯定ではない。「象徴的な意義」にこそ価値がある。ゲーテの立脚点は対象を象徴的にのみ把握する「純粋観照」の立場であると奥津は説く。そしてこう結論する。

> とにかく人類は如何に進歩するやうに見えても、それはただ變化であつて、本質は異るところはない。それ故に活動も對世界のものは無意義である。對自己の活動は自己を神に結合する。總ての現象の裏に潜む永遠なるものに近づくのはこの活動である。かくてこれはゲーテ晩年の叡智の結論であり、また「西東詩篇」の結論ともなるのである。

芥川が実際のところ、この詩になにを読んだのかは分からない。われわれは「或阿呆の一生」という作品のコンテキストから推測するだけである。「或阿呆の一生」の主人公は、「神を力にした中世期の人々に羨しさを感じ」ながら、「神を信ずること」「神の愛を信ずること」はできない（第五十章「俘」）。そして死ぬこともできず、「敗北」感に打ちのめされながら「運命」の到来を待つというところで作品は終わる。しかしこの作品には、さらに先に進むスプリング・ボードが仕掛けられていたのではなかろうか。それがまさに第四十五章Divan の「新しい力」だったのであり、その「力」こそ「死して、成れよ」の再生のモティーフだったのではなかろうか。もちろん、その結論が「西方の人」であることは言うまでもない。芥川が奥津訳の「胡蝶」を「蛾」と読んだとすれば、詩「至福の憧憬」のこの一句は、「西方の人」第二十七章「イエルサレムへ」の「我々は蝋燭の火に焼かれる蛾の中にも彼を感じるであらう。蛾は唯蛾の一匹に生まれた為に蝋燭の火に焼かれるのである。クリストも亦蛾と変わることはない」（第十五巻二六三）の表現に素直に結びついていくのである。

おわりに

芥川が「西方の人」第三十六章「クリストの一生」で、「聖霊は

この詩人の中にマリアと吊り合ひを取つて住まつてゐる。」「彼は実に人生の上にはクリストよりも更に大きかつた。」と書いたとき、主人公クリストとゲーテとの対比を明確にしたいという意思が働いていたのだと思われる。この時期の芥川自身もクリストとおなじく現実は自分に「復讐」するものと感じ、そうした凶暴な現実との和解の不可能性に苦しんでいたと考えられる。そうしたとき現実と調和的に生きているように見えるゲーテが「大きな」存在に思われるのは仕方がないことかも知れない。しかし「芸術」対「人生」という対立軸で考えると、クリスト対ゲーテの対立がそれほどの意味を持ってこないことが分かる。ゲーテも「芸術」に対して「人生」を重視したわけでは決してない。むしろ個別の体験を芸術化することによって昇華しようとしていたのである。芸術形式の媒介を経てこそ価値が生まれると考えたのであり、まさに創作の表現のなかにこそ「永遠」に至る道があると信じていたのである。

「西方の人」のゲーテも「唯聖霊の子供だつた為」に愛されるのである。この事情はクリストと何ら変わることはない。彼らの「価値」は「聖霊の子供」として生き抜いた人生そのものの価値である。聖霊の命にしたがって焔に飛びこむ蛾の美しさである。第三十五章「復活」は以下の言葉で閉められている。「しかし聖霊の子供たちはいつもかう云ふ人生の上に何か美しいものを残して行つた。何か『永遠に超えようとするもの』を。」おそらくこの「何か美しいもの」は、ゲーテの「永遠なるもの」と共通の基底を持っているのであろう。

芥川自身もやはり「芸術」の価値は疑わなかったように思われる。詩人クリストを創造し、「永遠に超えんとするもの」の運命を負わせたとき、そこに芸術家の運命を象徴的に表現したことは確実である。「西方の人」をひとつの芸術作品と見るならば、「芸術によって永遠に至る」という基本的な立場は、ゲーテと何ら異なるところはない。

では「人生の上にはクリストよりも更に大きかつた」と書き、「人生の上には」に敢えて傍点を付し、クリストとの対比を強調している意味はなんだろうか。クリストという「美しい人生」を全うした主人公を造形する。これだけではゲーテとの「差異」は認められない。これ以上進むには、作者芥川が自ら生み出したクリストと同化し、「美しい人生」を完成させるほかはない。駒尺喜美氏はこう書く。「芥川の内部には、自殺によって自己を全うしたい（それは自己の受難を受け入れるということでもある）、あるいは自殺によって自己の人生を芸術化（絶対化）したいという意識があったことは明らかだと思われる[20]。」また佐藤泰正氏は「彼の死は、その死をもつて自身の全生涯を一箇の『文体』と化そうとしたものであつたとも言えよう[21]」と記す。

芥川の死をいかに解釈するかは、そうたやすいことではない。ただ単純に鬱の昂じた末と考えるのは容易なことである。しかし「或阿呆の一生」の主人公のように「涎を流しながら」野垂れ死にしたのではないことは確かである。「西方の人」と「続西方の人」は、何か決然とした気品に満ちている。すくなくとも、芥川が「続西方の人」の最後に「しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう」と書き、「ゲエテは婉曲にクリストに対する彼の軽蔑を示してゐる」の文を挿入したのちに、「我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう」

と記して筆を擱いたとき、芥川のこころは、ゲーテに優越したとまでは言わないにしても、ゲーテとは別のこれまた「価値のある人生」を完結できたとの確信に満ちていたのではなかろうか。

注

1) 笹淵友一「「西方の人」論」海老井英次・宮坂覺編『作品論 芥川龍之介』一九九〇年十二月十二日双文社出版、三七〇頁
2) 前掲書三八二頁
3) 佐藤泰正「「西方の人」論」『國語と國文学』昭和四十五年二月一日至文堂
4) 前掲書一頁
5) 『芥川龍之介全集第十五巻』一九九七年一月八日岩波書店、二四八頁。芥川の著書からの引用はすべて同全集からとし、以後本文内に巻数と頁数を示す。
6) 高田瑞穂『芥川龍之介論考』昭和五十一年九月十日有精堂、二一六頁
7) 前掲書二二九頁
8) 前掲書（注1）三八三頁
9) 関口安義『芥川龍之介実像と虚像』一九八八年十一月十五日洋々社、二三四頁
10) 前掲書二三五頁
11) 宮坂覺「年譜」『芥川龍之介全集第二十四巻』一九九八年三月二十七日岩波書店、六九頁
12) 「芥川龍之介文庫目録」日本近代文学館所蔵目録2、昭和五十二年七月一日、日本近代文学館
13) 「目録」の概要には二十一冊と記されているが、「目録」自体には二十二冊（南江堂の教科書は除いて）のタイトルが掲載されている。
14) 参照、小堀桂一郎『森鷗外の世界』昭和四十六年五月八日講談社
15) 高橋健二『現代作家の回想』一九八八年五月十日小学館、一一頁
16) ビルショフスキ『ゲーテ――その生涯と作品』高橋義孝、佐藤正樹訳一九九六年一月二十九日岩波書店、一二三一頁
17) 『ゲーテ全集第二巻』大正十五年五月二十八日大村書店、「解題」一頁
18) Goethes Werke, Bd.2, Hamburger Ausgabe.München 1972, S.559.
19) ibid., S.19.
20) 駒尺喜美『芥川龍之介の世界』一九六七年四月五日法政大学出版局、一八九頁
21) 前掲書（注3）一〇頁